
コバルノカイコ

獅子唐 愛糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コバルノカイコ

【Nコード】

N2696Y

【作者名】

獅子唐 愛糸

【あらすじ】

男と少年の物語。

私はただの記録者である。

月は、今も傾いて。

epilog (前書き)

この物語はノンフィクションである。

私の友であつたとある男の死ぬ間際に遺された言葉をもとに今此処にある。

人の心理とは詰まるところ、興味と狂気。

美しき少年はもうこの世界のもとにはいない。

彼を殺した私の友であつたとある男ももういない。

だが記憶は記述となり記録となり物語として今綴られる。

この物語を信じる信じないは自由だ。

だが忘れないでほしい。

絶望とは望みを絶つことではなく、絶たれることであり

希望とは、与えられるものではなく見いだすものであるということ
を。

私の友であつたとある男と、この歪みきつた世界で純粹だった美し
き小さな少年に。

拙い文章ではあるが、餞として
今この物語を贈ろう。

epilog

これは、ノンフィクションの物語である。

私は今回既に亡くなってしまうた彼の代筆をつとめようと思う。

彼は白い病室で息を引き取る数秒前に私に忘れてほしくないと言った。

生まれてすぐ生きる意味を抹消され、それでも生きた、かの少年の話を。

しばらくの間、私の拙い文章にお付き合い頂けたら幸いだ。

尚、物語内の全ての人物は実在するため

許可を得て、恐縮だが仮名で登場していただきたいと思う。

獅子唐愛系

まずは、私とその少年との邂逅の話からしようじゃないか。

「それって何」

それが私耳にした小春コハルの最初の科白シタニだった。

新谷小春。

彼の名である。

当時小春は13歳だった。

付け足すなら当時私は16歳、記憶の隅にでも留めておいてくれ

ばいい。

その幼い声に振り返ると、そこにはどこかぼやけた大きな目を丸くしている小春が立っていた。

私は一瞬何に対して問われたのか理解できなかった。

いや、分かつてはいたのだ。

だが何よりも背後に人間がいたことに対する驚きと困惑で咄嗟に言葉が出てこず、あまつさえ思考すら停止していた。
私の足元、いや手元にあつたのは死体だった。

私はその日人を殺した。

小春はその目撃者であり、私の味方ではなかった。

「こ、れは…」

何と説明すれば良いのだろう。

目の前の少年は幼いが聡明そうな顔つきをしている。

14、5歳だろうか。

いや、そんなことはどうでもよい。

この少年は見てしまった。

生かしておいてはいずれ私の脅威となるだろう。

殺すか？

殺すべきだろうか…

その時わたしはまだ混乱していた。

「それは人？」

私が出そうになつては消える言葉達を懸命に選んでいる内に、再び小春は問いかけてきた。

す、とぎこちなく左腕を地面と水平になる高さまで持ち上げ、少年は私のほう……いや私では無いのだから指を差す。

私は瞠目し、狼狽えながらも数秒間を置いて

「そうだ」

とだけ応えた。

その声は低く掠れ、あまりにも無様な声であつただろう。

私は小春の言葉を待った。

「お兄さんは、何してるの」

至極単純な問い。

先程から甘つたるく舌つ足らずな日本語でゆっくり発音される小春の声は私の耳を侵す。

暗い公園の公衆トイレの裏。

その日は朝から雨が降り続き、深夜である今でさえも曇りがかった空には月が見えない。

きつと私の姿を小春は明瞭には視認していないだろう。

だが、街灯に照らされた小春の姿が私にははっきり見えていた。

地面についたままの右手の下にある凶器。右手と口元に残る私の狂気。

ないまぜになつて、それは私を支配している。

「お兄さんは」

私の返事を待つより先に小春は今一度小さな口を開く。

「どうして左目だけ泣いているの」

これが私と小春の最初の出会いである。

小春の失敗

けたたましい目覚まし時計の音と凍てつくような寒さで藤野慧は目を覚ました。ふじのけい

薄い掛け布団を体に巻き付けてゆっくり上半身を起こし、薄ぼけた視界の中部屋を見渡すと一瞬視界の隅に見慣れないものを捉える。そこには羽毛布団の塊があった。

「…？」

慧にはそれがなんなのかすぐには分からなかった。だがその羽毛布団がもぞりと動き、中から黒髪が覗いた刹那、昨夜のことが全てフラッシュバックし、それが何であるか一瞬にして理解した。

そうだ、自分はあの不思議な少年をあるうことか家に招き入れたのだ。

見れば、少年は小さな口を薄くあけ寝息をたてながらすやすやと寝ている。

寝顔だけみれば天使のようだな、と慧はらしくもないことを思ったが、なる程確かに少年は紛れもなく天使のように愛らしく無邪気な顔をしていた。

「はあ…」

慧は大きな溜息と共に昨夜の記憶を吐き出した。

昨夜――

「大丈夫？」

抑揚のない声と瞳で覗き込まれ、はっとした慧は目の前の少年から目を逸らすほかなかった。

だが、この少年を放置し死体を片づけ始めるわけにもいかない。いつそ殺すべきだろうか。

それにしても左目から流れる涙が止まらない。

少年に指摘されるまでもなく、慧は自分が涙を流していることに気付いていた。

とうの昔に失ってしまったと思っていた涙を。

今更になって、と毒づきこそするものの流れる涙をどうこうしようとは思わなかったが、やはり邪魔であった。

右手でそれを拭っている時、常に周囲に張り巡らせていた緊張がそれてしまったのか、慧は少年の接近を許してしまったのだ。

「お兄さん？」

「……君、名前は……」

「名前？小春こはる、小さく春」

「こはる……？」

変わった名だ。

空に指をなぞらせて書いた漢字が形もなく浮いている。

見た目は変わったところはないが、普通その漢字なら“こはる”ではないだろうか。

心中で首を傾げながら、慧は続けた。

「なんで…こんな時間に…？」

慧の問いに腕を組んで悩む仕草を見せると、少し間をおいてから

「おれには家無いから。今日は無いから」

と、抑揚なく答えた。

その言葉の真意が掴めなかったが、これ以上の問答に果たして意味

があるのか、慧にはそちらの方が重要だった。時間かせぎをする必要などどこにもないのだ。なにしろすでに、どこから小春が見ていたのかは分からないが、慧は見られてはならないものを目撃されてしまっている。引き返すことなどもうできない。

「ねえ、お兄さん、おれのも答えてよ」

少し苛立たしげに小春は返答を促した。

だが、慧は答える義務はないしそんなことを考えている余裕もなく、一言だけ「これを殺しているんだよ」とだけ返した。

そう、まだ終わってなどいないのだ。

慧はまだ第一の殺人さえを終わていない。それなのに、訳の分からない子供の戯言にいつまでも付き合っていられなかった。これ以上望まない殺人をしたいとも思わない。

「お兄さん、殺したんじゃないよね」

てきとうにあしらおうとし始めていた慧にどこか得意気に小春は何度目かの問いかけをした。

「おれには“食べてる”ようにみえたんだけど…」

みえたんだけど、のだけの部分は殆ど聞き取れなかった。

言い終える前に小さなその口を慧が左手で押さえつけたのである。勢いがついていたため、小春の軽い体はそのまま慧に押し倒されるかたちになった。

見られていた。

それすらも。

慧は焦りを隠せなかった。

どくどくと強く速く心臓が跳ねる。

額から汗が一筋涙と混ざって落ちた。

自分より倍はがたいのある大人が馬乗りになっているため、小春は内臓が潰れるような気持ち悪さを感じたが、明らかに先程までと様子の違う慧に怯えたのか大人しくしている。

2人を包む夜の間に沈黙が訪れた。

ざああ…

人間が騒がなければ、風はこんなにも健気に木を撫でる。

慧は小春を見ていなかった。

小春の頭の先、公園の出入り口の奥、ビールケースの詰まれた居酒屋の裏の路地、そのもつと先。

何も無いぼやけた視界の先をただ凝視していた。

左手の中で酸素を求め、小春が必死に手をどけようともがいているが気にしなかった。

一人殺すのも二人殺すのも同じか…

そしてやつと目線を下ろし小春と目を合わせたかと思うと、ぐつとその白い顔に己の顔を近付け触れるか触れないかの距離で自分の口の周りに付着した血液をゆっくり舐めとった。

乾きだしていたそれは、ひどいサビの味だ。

小春の大きな目と細い首がびく、と恐縮するのが分かり、慧は何故か歪んだ征服感に満たされた。

慧は血の味に飢えていた。

彼は重度のヴァンパイアフィリアだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2696y/>

コバルノカイコ

2011年11月17日17時53分発行